

学術調査報告書

2008年4月9日

(フリガナ)	カマダ ナオコ	入学年度	2007年度
申請者名	釜田 尚子	学年	1年

研究題目	フェルナンド・ペソアとその時代 ——1920年頃のペソア
主任指導教員	黒澤 直俊

(1) 学術調査の目的

今回の調査は、ポルトガル近代文学におけるフェルナンド・ペソアの①研究の現状調査、②資料の探索および収集の2点を主たる目的とした。

①の研究の現状調査に関していうと、フェルナンド・ペソアという文学者は作品群がまとめられていない文学者である。例えばペソアが生前に刊行した著作は一冊の詩集（ポルトガル語の書籍に限定）にすぎない。著作だけを資料とするとペソアのことほとんどがわからないといっても過言ではない。だが一方でペソアは様々な雑誌に論考や詩篇などの小品を発表しており、また膨大な数におよぶ未発表の手稿を残している。これらの小品や手稿を資料として新たに用いればペソア研究は豊かな成果をあげることが可能である。そのため研究に際しては、まずポルトガル本国において資料研究がどれほど進展しているか、常に注意しなければならない。資料は現在整理が進められており、資料の整理とともにペソア研究は日々進展しているのである。

この資料整理の進捗状態の最新を知る方法としては、ポルトガル本国における第一線の研究者との面会することが最も効率がよいのは言うまでもない。筆者は博士課程後期での研究活動の起点として、ペソアの書簡を用いることを考えている。この書簡はペソア自身が異名の起源を説明しているものとして重要視されているものの、その書簡自体に問題が多く存在しており、ペソアが語る内容と過去の事実との間に多くの齟齬があることが既に指摘されている。この問題を解決するためには、未発表の資料、つまりペソアが生前に発表しなかった資料を参照することが必要である。

②の資料の探索および収集に関しては、1920年前後のペソアおよびポルトガル近代文学

に関する資料を対象とする。現在ではインターネットの普及・発達により、ポルトガル国立図書館の所蔵資料を日本に居ながらにして検索することが可能であり、またサイト上での販売を行う書店や古書店が少なくないのも事実である。しかしそうした手段で入手できる資料は既に入手しており、博士課程後期における研究では、それ以上の資料が必要となる。そのためにはポルトガル本国における調査が必須である。

これまでの研究を通じて、ペソア本人の著作については、管見のかぎりでは入手済みであるが、ペソアをよりの確に評価するための同時代資料や研究書は不足している。今回の調査ではペソアが生きた時代の状況を示す資料の収集に特に力を入れたいと考えた。

さらに上記 2 点に付け加えると、今回は哲学を専門とする研究者との面会も実現する。ポルトガル近代文学および近代思想におけるペソアの位置づけについて質問することを今回の調査旅行の目的の一つである。

(2) 調査実施地および期間

実施地：ポルトガル国リスボン市

実施期間：2008年3月9日～3月22日（計14日間）

(3) 学術調査の具体的な実施内容

① ペソア研究者へのインタビュー

-1 イヴォ・カストロ氏 (Ivo Castro)

役職：リスボン国立大学文学部（教授・文献学者）

日時：2008年3月11日（火）14:00-17:00

場所：リスボン国立大学文学部 カストロ氏研究室

概要：氏は文科省が後援するペソアの手稿整理チームの責任者でもあり、文献学の立場から作業の指揮を執る人物である。今回のインタビューでは、ペソア手稿の整理状況に関して、特に文学作品以外のもの（書簡や走り書きなど）に関する現在の整理状況に関して伺った。

詳細：

・1935年書簡について

筆者が現在問題としているのは、1935年にペソアがカザイス・モンテイロに宛てた手紙である（以下「1935年書簡」と称する）。この書簡はペソア最晩年の手紙であり、手紙にはペソア自身が「異名」を語っていることに特徴がある。「異名」とはペンネームを超えたペソアの分身ともいうべき存在であり、ペソアの文学を語る上で欠かせない要素である。従来はこの1935年書簡に述べられた内容を基礎として、異名が論じられてきたが、筆者はこの資料に述べられている内容に、かねてより疑問を抱いていた。その疑問を端的に述べておくと、1935年という最晩年の時期に述べられる異名の問題は、異名が登場し活躍し始めた1910年代の状況と合致しないようにも思われる、ということである。

この1935年書簡に関してカストロ氏に質問したところ、この1935年書簡は従来より疑問視されており、これまで議論が重ねられてきた。特に注目すべきは1914年3月8日に関する事項である。1935年書簡では、1914年3月8日に代表的な異名であるカエイロ（ペソアの師とされる存在）が降りてきて、この日のうちに作品を2点仕上げたと述べられているが、調査してみると、1914年3月8日付の作品は存在しないことが判明した（その周辺日付は存在する）。

カストロ氏の指摘に従い、1914年3月8日日付の作品は存在しなかったとすれば、そして日付をペソアが勘違いしたのでなければ、1935年書簡に対する信憑性はわずかながらも失われたこととなる。

・ペソアの遺稿について

現在、「チーム・ペソア」の遺稿整理作業の成果として、ポルトガル造幣局より「フェルナンド・ペソアのテキストクリティック版 (*Edição Crítica de Fernando Pessoa*)」がシリーズとして出版されている。これは文学から始まり、最近では雑稿がまとめられ、出版されている。現段階の遺稿の整理状況を尋ねてみたところ、書簡についてはまだ出版されておらず、これからの課題とのことであった（カストロ氏が関係せず、テキストクリティークを受けていない書簡集なら、すでに出版されている）。

また、書簡やメモ類などの整理を行っているのはジェローニモ・ピザーロ氏であり、氏を紹介していただくことになった。書簡を扱うのは、それだけでも専門知識が必要であることである。

-2 ジェローニモ・ピザール氏 (Jerónimo Pizarro)

役職：リスボン国立大学文学部（研究生・文献学専攻）

日時：2008年3月18日（火）15:00-18:00

場所：リスボン国立大学文学部内 喫茶コーナー

概要：上記リスボン大学文学部教授イヴォ・カストロ氏よりピザール氏を紹介される。ピザール氏はカストロ氏の指揮するペソア手稿整理チームに所属しており、現在ペソアの個人的メモ等や書簡などの整理作業を中心となり進めている人物の一人である。今回のインタビューでは、整理作業の進捗状況、および作業過程において生じた様々な問題点や考察点などを伺った。

詳細：

・ペソアの個人的メモ（ノート）の存在に関して

ペソアは死後に膨大な量の書簡を遺しており、その整理・分類作業が現在文献学的観点で進められていることは前述した。カストロ氏はその陣頭指揮を取ると共に、異名カエイロの作品を中心に研究をまとめあげている。その他の異名の作品（とされるもの）については、それぞれ別の研究者が中心となり作業をしているが、文学作品以外の手稿（ペソアの個人的メモや書簡など）は、ピザール氏が中心となり整理・分類を進めている。

氏はその成果を近年『ペソアの遺稿(*A Arca de Pessoa*)（筆者仮邦題）』に著わしているが、そこにはペソア遺稿全体の整理作業の過程が述べられているとともに、氏が担当している文学作品以外のペソアの個人的メモや走り書きなどの存在も記されており、これらを研究チーム内ではペソアの「ノート」と呼んでいるという。氏によると、これらの文学作品以外の手稿の整理・分類作業から、ペソアが自らに狂気を認め、狂気と天才との関連性について深く傾倒していたことが見えてくるとのことである。（尚、氏はこれについて「フェルナンド・ペソアのテキストクリティック版」シリーズの一冊として『才能と狂気(*Génio e Loucura*)』を出版したところである。）

・書簡に関して

筆者はカストロ氏へのインタビューでも述べたように、ペソアの書簡を研究の起点に考えている。しかしペソアの遺稿は、書簡に至るまで、そのエディションが複数存在するといわれており、筆者はどの版に基盤をおくべきか決めかねていた。（前述の「フェルナンド・ペソアのテキストクリティック版」シリーズでは書簡は未刊行である。）

ピザロー氏によると、ペソアは手紙を書く際に必ずと言っていいほど写しを手元に残したというが、その写しが往々にして受取人が受取ったものと異なるという。それが書簡のテキストクリティック版出版を困難にしている一因でもあり、現在のところ出版されている書簡は、あくまで受取人ごとにまとめられたもの、つまりペソアが実際に投函し受取人が受取り保管していた書簡である。書簡の「フェルナンド・ペソアのテキストクリティック版」シリーズにおける出版は未定とのことであり、現時点において研究用の資料として扱うに足るものとして氏の研究書を紹介いただいた。それは以下のとおりである。

—Pessoa, Fernando, edição de Jerónimo Pizarro, *Obras de Jean Seul de Méluet*, INCM, 2006

—Pessoa, Fernando, edição de Jerónimo Pizarro, *Génio e Loucura, tomo I,II*, INCM, Lisboa, 2006

—Pessoa, Fernando, edição de Jerónimo Pizarro, *A Educação do Stoico*, INCM, Lisboa, 2007

—Pizarro, Jerónimo, *Fernando Pessoa: entre Génio e Loucura*, INCM, Lisboa, 2007

-3 カーンディド・ピメンテル氏 (Manuel Cândido Pimentel)

役職：ポルトガル カトリック大学人文学部哲学科（教授）

日時：2008年3月17日（月）10:30-13:00

場所：ポルトガル カトリック大学人文学部内 会議室

概要：ピメンテル氏はポルトガル哲学史の研究者であり、特に20世紀前半の代表的思想家レオナルド・コインブラ研究における第一人者である。

今回のインタビューでは、ポルトガル哲学史におけるペソアの位置づけ、ポルトガル近代思想の中心とも言うべきサウドジズモおよびサウダーデの系譜に関する氏の見解などを伺った。

詳細：

・近代ポルトガル思潮における「サウドジズモ」について

筆者は修士論文において1912年から1915年までのペソアを研究対象とした。この時代のポルトガルは第一次共和制樹立後の政治的混乱の中、様々な思潮が登場した時期であり、その中でも雑誌『アーギア』をその活動の媒体としていた「ポルトガル・ルネサンス」

グループが傑出している。ペソアも 1912 年以來このグループに属し『アーギア』に作品を寄稿するも、約 2 年半後には脱退している。その後自らが中心となり別のグループを結成し、雑誌『オルフェウ』を創刊する。この『オルフェウ』をもってポルトガル第一次モダニズムが始まったとされている。

ペソアが所属していた 1912 年時期の「ポルトガル・ルネサンス」は、テイシェイラ・デ・パスコアイスが提唱する「サウドジズモ」実践のグループであり、そこから近代ポルトガルの思想家レオナルド・コインブラをはじめ多くの思想家や文学者、政治家を輩出している。この「サウドジズモ」は、中世より存在する「サウダーデ」という言葉に基づくポルトガル独特の感情や思考をパスコアイスが思想にまで高めたものと言えるが、ペソアもパスコアイスの「サウドジズモ」に深く共鳴していたことは周知のことである。後にペソアは「ポルトガル・ルネサンス」グループを離れていくが、それは決して「サウドジズモ」から離れていったわけではなかった。ピメンテル氏の見解によると、ペソアの「ポルトガル・ルネサンス」グループ離脱はすなわち「サウドジズモ」からの離反を意味するわけではないとのことである。

「サウドジズモ」という思想は曖昧でとらえどころのない一面があり、「ポルトガル・ルネサンス」グループは「サウドジズモ」を単に文学上・思想上のもののみにとどめず、政治や教育など一般大衆の啓蒙としても応用し活動していた。そこには明らかにナショナリズム的側面が看取されうる。氏によればペソアのサウドジズモと「ポルトガル・ルネサンス」のサウドジズモとは非常に異なるものであり、ペソアはグループ離脱後も独自のやり方で「サウドジズモ」を探求し、あるいは越えようとしていた。

・近代ポルトガル思想におけるペソアについて

「ペソアは哲学者として認められうるのか」という筆者の漠然とした問いに対して、氏は次のように答えてくださった。

ペソアは確かに哲学的思考を多く行っており、それは遺稿を見ても明らかである。しかしペソアの思想はあくまで膨大な、しかしながら偏向のきらいがある読書に支えられたものであり、それを思想とするか単なる思考とするかはとらえ方次第である（確かにポルトガル近代思想史においては、ペソアは主流とははずれた得意な存在として位置づけられている）。ただ、ペソアの生んだ「異名」を彼の思想体系とするならば、哲学者としての研究対象と十分になりうる。いずれにしても「異名」はペソア研究においては欠かせない

点である。

-4 サムエル・ディアス氏 (Samuel Dias)

役職：ポルトガル カトリック大学人文学部哲学科 (助教)

日時：2008年3月19日 (水) 14:00-18:00

場所：ポルトガル カトリック大学人文学部内 ディアス氏研究室

概要：ディアス氏はポルトガル近代思想を専門にしており、研究活動の一環としてフェルナンド・ペソアにおけるクリスティアニズムを研究対象としていたことがある。

今回のインタビューでは、ペソア関連資料探索の具体的手段 (一次・二次資料および国立図書館所有資料等に関する情報の検索方法など) について伺った。

詳細：

・有効な二次資料の探索について

20世紀ポルトガル最大の詩人と言われるペソアについては、当然ながら膨大な量の研究書が存在する。氏は以前ペソアにおけるキリスト教主義を研究テーマとしていたことがあり、その際に作成した参考資料目録を提供してくださった。

その中で絶版となっているが非常に有用な資料について、その入手可能な方法などについての指摘も頂いた。ポルトガルでは書籍の刊行は初版のみの場合が多く、学術書に関してはそれが著しい。出版元に在庫を問い合わせることはしばしば徒労に終わることも多い。そのため古書店における資料検索が重要となってくるが、古書店にもまた相互間の連携を有する書店とそうでないもの、あるいはポルトガル国外在住の研究者に対する資料検索や発送を行ってくれる書店などがあり、こうした事情はリスボンに在住し研究するものでないとわからない情報と言える。氏には主にリスボン市内で文学関連の専門書を扱う古書店 (ラッシオ、アヴェラール・マシャードなど) を紹介いただいた。また、一次資料およびペソアに関する二次資料、サウドジズモおよびモダニズム関連の二次資料のうち有益なものを指摘いただき、その入手方法などに関してもアドバイスも頂戴した。

—Fernando Pessoa, *Obras de Fernando Pessoa*, introduções e notas de António Quadros e Dalila P. da Costa, Vol. I. II. III, Porto, Lello e Irmão-Editores, 1986;

—*Orpheu*, Lisboa, 1915, n.º 1 e 2; *Orpheu, Edição Facsimilada*, números 1 & 2, provas de página do terceiro número, Lisboa, Contexto Editora, 1994.

—Jacinto do Prado Coelho, «Sobre o Movimento de *Orpheu*», in *Estrada Larga, I*, Porto, Porto Editora. s.d. (organização de Costa Barreto);

—Massaud Moisés, «Fernando Pessoa e a Poesia de Orpheu», in *Revista da Faculdade de Letras de Lisboa*, série 6, n.º 13, 1971;

—Yvette Centeno, «Os Fantasmas de “Orpheu”», in *Cultura Portuguesa*, Lisboa, n.º1, Agosto/Setembro de 1981; 他 多数

(以上、一次資料およびペソアに関する二次資料)

—José Augusto Seabra, «A Renascença Portuguesa: uma Re-Nascença do Porto», in «Cultura e Arte», Suplemento literário de *O Comércio do Porto*, 2 série, n.º11, 1-07-1980;

—Massaud Moisés, *As Estéticas Literárias em Portugal*, vol III - Séc. XX, Lisboa, Editorial Caminho, 2002;

—Paulo Samuel, «A Renascença Portuguesa ou a Fisionomia da Alma Pátria», in *Leonardo*, Ano I, n.º 1, Março de 1988, pp. 3-10.

—Teixeira de Pascoaes, «O Saudosismo e a Renascença», in *A Águia*, 2.ª série, n.º 10, Outubro de 1912;

—Teixeira de Pascoaes, *A Saudade e o Saudosismo*, compil., introdução e notas de Pinharanda Gomes, Lisboa, Assírio e Alvim, 1988; 他 多数

(以上、サウドジズモおよびモダニズム関連二次資料)

② ペソア関連資料の調査および収集

-1 ポルトガル国立図書館 (Biblioteca Nacional)

・一般閲覧部

ペソア資料として非常に有用であるが、現在絶版状態でありかつ古書店探索においても入手不可能であった以下の資料の閲覧・複写を行った。

—Botelho, Afonso., Teixeira, António Bráz. *Filosofia da Saudade*, Imprensa Nacional – Casa da Moeda, Lisboa, 1986

: 「サウドジズモ」および「サウダーデ」を知る上で基礎となる文献。

—Boavida Portugal, *Inquérito Literário*, Livraria Clássica Editora, Lisboa, 1915

: 1912年に起こった文学論争において各知識人が寄稿した論考をまとめたもの。筆者

はこの論争をペソアの「ポルトガル・ルネサンス」離脱の直接の原因と見ている。

—Lopes, Teresa Rita, *Pessoa por Conhecer vol. 1,2*, Estampa, Lisboa, 1990

—Lopes, Teresa Rita, *Fernando Pessoa a biblioteca impossível*, Câmara Municipal de Cascais, 1995

—Lopes, Teresa Rita, *Pessoa, Sá-Carneiro e as três dimensões do Sensacionismo*, Fundação Calouste Gulbenkian, Lisboa, 1971

—Lopes, Teresa Rita, *O Encontro de Fernando Pessoa com o Simbolismo Francês*, Fondation Calouste Gulbenkian, Paris, 1983

：テレーザ・リタ・ロペス氏はペソア研究における第一人者の一人であり、1970年代よりペソアの遺稿の整理および未出版部分の発表を行っており（カストロ氏主導「チーム・ペソア」とは異なる）、1990年代まで精力的に研究を発表している。現在では第一線を退いているようであり、今回筆者が面会を希望するも連絡がつかずに終わった。氏の著作および研究論考は、最新とは言えないもののペソア研究において重要な位置を占めていることは確かである。しかしながらポルトガルの出版事情（特に専門書の再版が稀である）により入手が困難なのが現状である。

・マイクロフィルム閲覧部

—*Catálogo dos Jornais Microfilmados*, 1ª edição, Biblioteca Nacional, Lisboa, 1989

—*Catálogo dos Jornais Microfilmados*, 2ª edição, Biblioteca Nacional, Lisboa, 1990

上記2点の目録を元に、図書館が所蔵する1900年初頭の新聞および雑誌資料の中で、ペソア関連記事の検索および複写を行った。

—A Capital 紙

：1915年3月30日付…『オルフェウ』創刊に対する批判記事。

1915年4月3日付…論敵ジュリオ・ダントスの出版物に関する好意的批評。

1915年6月10日…テオーフィロ・ブラーガによる「カモンイスの日」についての記事。

—O Mundo 紙：1915年6月5日…『オルフェウ』メンバーの一人ラウル・リアルに関する批評記事。

—Diário de Notícias 紙：1916年4月26日…サ・カルネイロ自殺の記事。

—Revista Portuguesa 誌：『コンテンポラネア』誌（ペソアが寄稿した雑誌）に関する批評記事。

・ **アーカイブ閲覧部**

マイクロフィルム化されているペソア手稿の閲覧を行った。

-2 フェルナンド・ペソア記念館 (Casa Fernando Pessoa)

ペソアが歳晩年に暮らした家を 1993 年リスボン市が記念館としてオープンした施設である。ペソアの部屋や遺品（家具やタイプライター、パスポート、メガネなど身の回りの品々）を公開しており、閲覧はできないがペソアの蔵書も有している。またペソア関連の研究書などの出版物も閲覧することができる。

ペソアが実際に使った物を目で確かめるという目的は達せられたが、あくまで一般向けの観光施設の感が強く、ペソアの蔵書の閲覧は不可能であり、所蔵研究資料も国立図書館の蔵書量には及ばないものであった。

そんな状況ではあるが、以下の研究資料の複写を行ってきた。

—Machado, Luís, *À Mesa com Fernando Pessoa*, Edições Pandora, Lisboa, 2001

—Etorre, Finazzi-Agrò, *O Alibi Infinito*, IM-CM, Lisboa, 1982

-3 その他

・ **文化施設出版局（部）**

グルベンキアン財団 (Fundação Calouste Gulbenkian)

ポルトガル造幣局 (Casa da Moeda - Imprensa Nacional)

・ **出版社**

アシリオ・イ・アルヴィン (Assírio & Alvim)

・ **その他市内有力書店・古書店**

ベルトランド (Livraria Bertrand)、ブリョーザ (Livraria Bulhosa)、フナック (fnac)
(以上、文学関連の書籍が充実している書店)。

ラッシオ (Livraria Lacio)、アヴェラール・マシャード (Livraria Avelar Machado) 他
(以上、文学関連書籍が充実している古書店)。

③ ペソアの生きた時代および地域の検証

今回の目的の一つであったのが、ペソアの生きた時代および地域の検証であった。

ペソア生誕の場所であるカモンイス広場と最期の居住地であった場所（ペソア記念館）、リスボンの文学仲間たちと日々討論を交わしたと言われるカフェ・ブラジレイラなどは訪れたが、今回は①の研究者との面会、②資料の探索および収集に時間と費用のほとんどを費やしたため、本目的は次回への課題とせざるを得なくなった。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

今回の調査の目的を確認してみると、①ポルトガル本国における研究者との面会、②資料の探索および収集である。

今回筆者の研究にとって一番有益な結果を得られたのは、①の研究者との面会であった。(3)で詳細を述べたとおりであるが、文献学と哲学といった分野からペソア研究を行う計四名の研究者にそれぞれ意見を伺った。

まず文献学専攻の研究者によるペソア遺稿の整理作業の現状についてであるが、遺稿の整理は現在も進行中であり、筆者が研究の起点とする書簡に関してもまたそれは言えるといった現状が確認できた。特に筆者が今後の研究における起点と考えている1935年書簡に関しては、カストロ氏主導の「チーム・ペソア」が稼働する前からさまざまな説が存在しており、遺稿整理作業の進捗にともないそういった疑問点が次第に解明されつつあると同時に新たな疑問点も生じていることがわかった。また未発表作品、殊に文学作品以外の書簡や個人的メモ（ペソアの「ノート」）の類は、様々な出版社がそれぞれ独自のやり方でそれらを分類し出版しているが、筆者の研究においては、本源であるペソアの直筆資料に基礎を置くことはもちろんであるが、いわゆる「混乱した」それらの資料を、文献学的法則に則り（それがペソアの意図により近いものかどうかは別として）再現されたテキスト・クリティック版を選別し用いることが最良であると思われる。

哲学専攻の研究者へのインタビューから得られたのは、ポルトガル近代思想におけるペソアについてであった。サウドジズモはポルトガルの近代思想の主流をなすものであるが、これがペソアに与えた影響はペソアを研究するにあたり無視することが出来ないものである。その影響は、ペソアがサウドジズモのグループ「ポルトガル・ルネサンス」に所属していた時期だけでなく、グループ離脱後も続いていたというのが今回面会した研究者の見

解であった。この点は、ポルトガルにモダニズムをもたらした人物の一人と言われるペソアは決してそれまでの思潮であったサウドジズモを否定したわけではなかったという筆者の見解と一致するものの、ペソアにおけるサウドジズモの重要性については筆者が従来抱いていた見解では不足するものであるとわかった。いずれにしてもペソア「以前」のポルトガルの思潮にも着目し、それらとペソアの関連性を考察あるいは比較検証することも、同時代におけるペソアの位置をはっきりさせる上で非常に有効な手段の一つとなりうるのではないかと考えるにいたった。

研究者との面会により、②の資料の探索および収集に関する情報も多く得られた。ポルトガル近代における最大の詩人であると言われるペソアについては、研究者のみならず多くの作家が何らかの形で書いており、そうした諸研究の有益性を判断するのは日本に在っては困難な場合が多い。さらには筆者が知らない重要な二次資料の存在も指摘いただくなど、今回の面会により②の作業に関する示唆も非常に多く得られた。

また、国立図書館マイクロフィルム閲覧部において1920年前後の新聞・雑誌の閲覧を行ったが、あらかじめ予定していた媒体の所蔵が無いこと、複写にある程度の制限があることなどから、収集量は予定していたよりも少ないものとなってしまった。しかし予定していた媒体や日付以外にも関連記事が多く見つけられたので、今後の課題として、媒体別に『オルフェウ』やペソアが寄稿した雑誌あるいは関係した人物に対する当時の世論をまとめることも、研究における一つの視座となりうるのではと考えた。

ペソアが生きた時代や地域の検証に関しては、上述のとおり、今回は研究者との面会およびその結果を反映させての資料の探索・収集に時間と費用のほとんどを費やした結果、次回への課題となってしまった。

以上が今回の学術調査における結果および考察である。研究者との面会および資料の探索・収集は、本国でのみ出来ることが多く、その点では非常に有意義なものとなった。結果を持ち帰り、今後の研究に役立てるつもりである。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

- ① フェルナンド・ペソア記念館 (Casa Fernando Pessoa) 正面より：ペソアが歳晩年に居住した家をリスボン市が 1993 年に記念館として開設した。



- ② 国立図書館 (Biblioteca Nacional) 正面玄関



③ ポルトガル カトリック大学 (Universidade Católica Portuguesa) : 正面より



④ リスボン国立大学 文学部 (Faculdade de Letras, Universidade de Lisboa) 正面より : ファサード内側には、同時代の画家アルマダ・ネグレイロスによるペソアや異名たち (カエイロ、カンポス、レイスなど) の装飾画が施されている。



以上